
どないやねんッ！　～いいからテメェ等帰ってくれ～

滾

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どないやねんッ！　　ゝいいからテメエ等帰ってくれゝ

【Nコード】

N2302C

【作者名】

滾

【あらすじ】

ヤツが再びやってきた。モチロン、彼女を引き連れて。それと、あと一人……。誰だお前……？

一話 誰ゾ！？

午後五時。

僕は家に居ました。

特にすることもなく、椅子に座って漫画を読んでいたのです。
すると、

ピンポン・・・

最近取り替えたばかりのインターフォンが鳴りました。

まだ聞きなれないそのインターフォンに気だるさを覚えながら、僕は漫画本を置いて玄関に向かいました。

いつもならば母なり祖母なりがインターフォンを取るのですが、生憎その日は僕しか居ませんでした。

「へいへい・・・」

誰ですかね？と、玄関を開けました。

あー、っと、

僕の家つてのは、口で表現するのが難しいのですが、家の玄関を出てからちよつと10mくらい歩いた所に、家の敷地を出る表玄関があるのです。

だから玄関を開けて、ちよつと歩いた時点で誰が来ているのかは解るのです。

奴だ。

僕は立ち止まりました。

奴です。

ヤマダ（仮）です。

来ましたよ。奴が。モチロン、隣には彼女さんの姿も見えます。物凄くUターンしたかったです。ムーンウォークが出来たなら、向こうに歩いてる振りして家の中に戻っていきたくかったです。

が、生憎僕はムーンウォークができないので、そのまま歩くしかありませんでした。

そして、

「よお」

と、ヤマダが手を挙げました。

「よお・・・」

と、僕も手を挙げました。

「こんばんわ」と、彼女さんは頭を下げました。毎回思うのですが、この彼女さんは凄く礼儀正しいですね。

閑話休題。

僕は彼女さんにも挨拶をしました。そして、「何の用？」と表の玄関を開け、

「・・・あ？」

気付きました。

気付いちゃいました。

ヤマダの右隣。彼女さんの左隣。二人の間に、誰か居る。

誰ゾ！？

僕は一瞬身じろぎしました。

だって、全く見覚えの無い男性が立ってるんですもん。

誰さ。アンタ誰さ？

今度ばかりは、中学時代のクラスメイト、とかそういうものでもな

いです。

一切記憶の中にその人の顔がありません。まさしく初対面です。

「あ、どうも・・・」と、その人は頭を下げました。

「あ、どうも・・・」僕も下げました。

誰？って凄く聞きたかった。

まあ、ともかく。

「上がれよ」

と、いう事で、やっぱり今回も僕は彼等を家に上げてしまつのでした。

一話 誰ゾ！？（後書き）

ヤツの話です。

そういう事なのです。

二話 メンバー追加

さて。さてさて。

ここは僕の部屋の中。僕の他に三人の人達がいらっしやいます。ヤマダと、彼女さん。そして、

タカノ（仮）君。

誰ですかね。この人は。

やはり僕の記憶の中にこの人は居ません。先ほどヤマダに「タカノ君だよ」と紹介されましたが、知りません。

聞くに、タカノ君はヤマダと彼女さんの高校のクラスメイトだそうです。何故だか今日は二人についてきてしまったそうです。

何でそんな・・・。

そんな人だからよほど明るい感じなのかなあ、と思っていたらばこの部屋に入ってから一切口をお開^あけになりました。

多分、二人の雰囲気^{きふく}に圧されて来ちゃった感じだと思います。

「で？」

何の用？

ベッドに右から彼女さん、ヤマダ、タカノ君と座っているのですが、その真ん中のヤマダに問いかけました。

すると、ヤマダは一言、

「あ、いや、今日はノープラン」

あ？

ノープラン、

だ、そうです。

今の「ノープラン」発言にモチロン僕は驚いたのですが、それよりも驚いていたのは誰あるうタカノ君です。

僕も、「え？」って顔になりましたが、それ以上に「え？」って顔をしてらっしゃいました。

「え？」って。

さて、僕も高校から帰ってきて間もないので本当はスグにでも寝たいのですが、そもいかないようです。

現時刻、四時半少し前。

まあ、何かをやるうと思えば出来なくも無い時間帯です。

が、はつきり言って僕はこのメンバーで何をしようとも思いません。一切思いません。

が、何かいい加減タカノ君の顔の引きつり具合が限界です。

笑顔作って良いのか困っていいのかわからずに、何やら歪こわな表情になってます。

このままだとタカノ君の顔面が神経痛になりかねないので、僕はあの行動に移りました。

行動一 携帯電話を取り出して、友達のフォルダの中から、今暇そうな人達の名前を数人探し出す。

行動二 そいつ等にひたすら連絡をする。

行動三 呼ぶ。

行動四 迎える。

とりあえず行動一、二から、5・6人の人間に連絡をとりました。で、とりあえず3・4人に連絡ついたので、

呼びました。

あれです。

毒を食らわば皿まで

ってやつです。

こうなったら人を呼びまくってやるぜ。

ってことで呆気に取りられる三人を他所に三人をこちらに向かわせる事に相成りました。

一人は中学時代、ヤマダと僕と同じクラスの一員だった“トクノ（仮）さん”。女性です。

二人目は同じ年のお友達の“ブロンドA”。

三人目は“ブロンドA”のお友達の“ブロンドB”の三人です。

程なくして、ブロンドA、Bが原付で我が家に到着。ブロンドの髪をかきあげつつ、僕の部屋に向かいました。

ブロンドA、Bが部屋に入ったときの他三人の顔は今でも忘れません。

さきほどのタカノ君の「え？」顔の十倍の「え？」顔をしてらっしゃいました。

「あん？滾、コイツ等誰？」

「友達」

「マジで？何すんの？」

「もう一人くるから待ってろ」

そんな会話をしているともう一人の待ち人“トクノさん”が自転車で到着。

迎えると、

「やあん、久しぶりだねえ！」

と相変わらずのハイテンションでした。

僕、ヤマダ、彼女さん、タカノ君、ブロンドA、B、トクノさん。

この六人をそろえると化学反応が起こる。

僕がその事を知るのは、もう暫く後の話なのです。

二話 メンバー追加（後書き）

テストやらなんやらで遅くなっていました。

そういえば今回初めて僕が高校生である事を明かした気がします。

まあともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

三話 シュラバ

さて、

さてさて。

部屋が狭いです。

至極狭いです。

未だかつてこんなに部屋に窮屈感を感じたことはありません。
まさしく初体験でございます。

とりあえず僕の部屋の中には六人のセイエイが集っているわけですが、その配置をお伝えします。

僕はいつもどおり、パソコンの前の椅子に。

ブロードA、Bは僕が座っている椅子の後ろの床に座って。

そしてベッドの上に、右からタカノ君、彼女さん、ヤマダ、トクノさんの順に座っております。

ね？

今違和感に気付いた人挙手。

いないのか？うん？居ないのか？

・・・・・・ハイ（挙手）。

僕のベッドはですね、そんなに大きくないのです。

いや、一般基準よりは大きいのですが、四人横に並んで座って余裕
綽々とまではいかないのです。

さらに言えば、タカノ君と彼女さんの間にケツコウな隙間があるので、残された三人の距離がどうしても詰まってしまいます。

が、まあ頑張れば一人分は開けられるかな？程度の余裕はあるのです。

が、別にヤマダと彼女さんの間に隙間は必要ありません。何故なら二人は付き合っているのですからね？

ここまではOK。

ちーまんたい
無問題。

けどね？

ダケドネ？

なぜ、トクノさんとヤマダの間の距離が零なのでしょう・・・？

ヤマダが彼女さんとトクノさんに挟まれている状態になっています。

「何かスゴイ久しぶりだねえ」。元気してた？」とトクノさん。

「え、あ、うん」とヤマダ。

「何か雰囲気変わったねえ。カッコよくなったよ」とトクノさん。

「あ、そ、そう？ありがとう・・・」とヤマダ。

な〜にさこのラブコメ。

あれです。

トクノさんはあれなんです。

クラスに一人は居るような、ボディータッチがやけに多い女子タイプの人なんです。

会話の最中もずっと、ヤマダの肩を突いてみたり、顔を覗かせてみたりと、傍から見るとラブラブなカップ（カップル）にしか見えません。

あゝ、っと。忘れていました。タカノ君の事を完璧に忘れていました。ふ、と、そっちを見ます。

ポツツーン・・・

そんな効果音が聞こえました。絶対聞こえました。

全世界に一人きりなんだぜ・・・。

そんな表情をしてらっしゃいます。孤独の頂点を極めてらっしゃいます。

なんか今にも孤独死してしまいそうな、やるせない表情で虚空を見つめてらっしゃるのです。

そう、まるで畳の目の数を数えるかのようにッ！

もうそんなタカノ君は・・・、

スルーします。敢^あえて。

気を取り直して、ブロンドA・Bの方を見ます。
本読んでます。

はい、おしまい。

ああ、そういえば彼女さんはどうしてらっしゃるのかな？

僕はふと思ったので、そっちもちらつと見ました。

ちらつ、とね。

本当にちらつとみました。

と、いうか、

ちらつ、としか見れなかったのです。

だつてさ、だつてさ、

すんげえ睨んでるンスよ。彼女さんがトクノさんを。

ものゴッツ睨んでるンスよ。メッサ怖いンスよ。
ああ、地獄を見るぜ・・・。

僕はようやく、その事に気付いたのです。

三話 シュラバ（後書き）

ふと気付けば、「小説家になろう」に初めて小説を投稿させていた
だいてから早くも一年が経っていました。
それだけです。

四話 タカノカエル

さて、

さてさて、

シュラバです。

修羅場です。

僕の部屋の中なのに、何故か僕ではなく友達が修羅場です

僕はパソコンの前でパソコンを弄っている。フリをしています。

さつきから同じページの同じ行を繰り返してクリツカエシ見ています。

ずっとマウスもキーボードも動かしてすらいません。

マウスの上に手をのせているだけです。

僕が座っているパソコンの右隣にベッドはあるのですが、もうそっちの方に視線をもっていけません。

えーっ、と、

改めてもう一度今の状況をお浚い^{はぐい}しましょうか。

まず、

ヤマダ（仮）、彼女さん、タカノ君（仮）が僕の家を訪問。

僕と始めましてなタカノ君はこの場につれてこられたことにすら困惑気味。

それ以上に僕は困惑気味。

特に理由も無く僕を困惑させたヤマダに腹が立って更に三人の友人を追加。

その中の一人が僕とヤマダとが昔同じクラスだったときに、共に同

じ教室で授業をしていた女子生徒のトクノさん（仮）だった。

三人が僕の部屋に集い、合計7人が僕の部屋に。

僕のベッドの上にタカノ、彼女さん、ヤマダ、トクノさんが座っている。

ヤマダの隣に座ったトクノさんのヤマダへのボディータッチがすごい。

ヤマダ、困惑しながらもデレデレ。

彼女さんのヤマダへの苛立ちにメラメラ。

僕はオロオロ。

今ここ。

「ヤマダ君さあ、今でもサッカー続けてるのぉ？」

「あ、いや、練習きつくてさ、やめちゃった・・・」

「ええー、そおなの？なあんだあ。まだ続けてたら、試合応援に行つたのにい」

ラブラブラブラブ。

僕の部屋でイチヤイチヤするのはさすがヒでもやめていただきたいのですが、この状況を誰よりも般若の形相で見つめているのは勿論彼女さん。

ヤマダもそれに気付いているのか、チラチラと彼女さんの方を窺っています。

ブロンドA、Bは相変わらず床に座ってグラップラー刃牙や餓狼伝見てたりで、その他のことには一切触れていません。

さすが、急遽集まった奴等だけあってチームワークもヘツタクレもあつたもんじゃありません。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、ここで、彼のタカノ君に異変が。

ベッドから立ち上がったかと思うと僕の肩を叩いて、

「もう、帰ります」

と小さく言っていました。

「デメエつまんねえだよボケがあッ！」

とか言われたらどうしよう、と不安になっていた僕は胸を撫で下ろしつつ、

「あ、そう？じゃあ・・・」

そこまで送るよ。と、僕も席を立ちます。

二人して部屋を出る折、チラッとヤマダ達の方を見ました。

彼女さんの表情が文章では表現できないほど般若だったので、即効で目を背けたのはいうまでもありません。

家を出、庭を横断して玄関へ。

「何かスミマセン」

と、急にタカノ君が謝り始めたので、

「はい？」

と僕は笑顔で答えました。本当の事を言えば、あと10回ほど謝って欲しい感じです。

「急に來てしまって・・・」

とタカノ君は若干俯いてしまいます。

大丈夫です。とか何とか言って、その場を何とか言いつくろい、自転車に乗って去ろうとするタカノ君を見送ります。

「それじゃあ・・・」

「ああ、それじゃあ」

バイバイ、と手を振って、タカノ君は去っていきました。

暫く彼の背中を見送った後、僕は自分の部屋へと戻っていくのでした。

が、

部屋を開けて僕は硬直しました。

カッキーンと。

カッチーンと。

まあどっちでもいいんですが、トにもカクにも固まりました。

ブロンドAは僕がさっきまで座っていたパソコンの前の椅子に座りパソコンを弄り、

ブロンドBは彼女さんに向けて話かけています。

依然としてトクノさんはヤマダに話しかけ続け、

彼女さんはブロンドBの言葉を受け流しつつ、ヤマダに向けて冷たい視線を送り続けています。

何よこの構図。

僕は居場所もないまま、

扉の前でただ立ち尽くすのでした。

四話 タカノカエル（後書き）

最近バイトの面接に4回連続不採用です。
それだけです。

最終話 カエレ！

ヤマダ、彼女さん、トクノさんは僕のベッドの上に。

ブロンドAはパソコン前にある椅子（僕の）の上に。Bは床においてあった僕の枕の上に。

そして僕は、

何故か扉の前で立ち尽くしております。

ちなみにここは、

”僕の部屋”です。

もう意味解りません。全然解りません。1mmたりとも解りません。

っていうか解りたくありません。

ブロンドAとBはもはや自分の世界です。Aはパソコンを、Bは漫画を読んでいます。

まあ、コイツ等はもはやどうでもいいんです。

所詮は数合わせに過ぎません。というか、冷静に考えれば

数合わせでもなんでもありません。何を持って数合わせなのかさっぱり解りません。

そもそも、その“数合わせ”の所為^{せい}で、ベッド上では熱い戦いがさつきから繰り広げられています。

あ、別に変な意味じゃないです。

ヤマダを挟むようにして、彼女さんとトクノさんが両サイドを固め

ています。

まるでどこかのラブコメのような状況を僕のベッドの上で展開しています。

トクノさんは執拗にヤマダとコミュニケーションを撮ろうとしています。

それに対して彼女さんは猛烈に睨みをきかせています。

これがこれまでのあらすじです。

つまりは修羅場です。修羅場 in マイルームってやつです。

もう全然意味が解りません。

とりあえず、そんなこんなで僕は扉の前から動けずに居るのです。

その事にさえ、もはやノーリアクションです。普通、「何でそんな所に居るの？」的な発言があつて然るべきです。

が、扉の前に居る僕に対して、皆は一切触れてくれません。

この部屋の所有者は僕なのに。

ところで、ブロンドBが呼んでいた本を床に置きました。

とうとう身の回りに置いてあつた漫画を全て読み終わつたようです。手持ち無沙汰になり、暇になつたBはキョロキョロと周りを見回しました。

すると何を思つたのでしょうか、突然Bは、

トクノさんを凝視し続ける彼女さんに話しかけたのです。

「何^なやつてんのオオオオオオッ！」

と叫びたくなつたのをグツと堪え、僕はBを見ました。

と、いうより、「お前ナニやつてんのサ!？」という念を送ってみ

たのですが、Bはそんな念を一切シャットアウト。

そんな事に気付くことなく、彼女さんに向かって「どこの高校通ってるの？」とか、「彼氏は？」とか聞きまくってます。

それに対して彼女さんは、「ああ」とか、「うん」とかかなり冷たい返事を返すばかり。

Bは若干涙目です。

っていうか、その隣にいるのがその“彼氏”なのですが、そういえばブロンドA、Bを含め、トクノさんにもヤマダが彼女さんの彼女だという事を説明していませんでした。

ああ、そう考えれば、トクノさんがヤマダに話しかけているのも頷けるかもしれません。

トクノさんはきつと、ヤマダの隣に不自然なほど密着してヤマダと腕を組みながら座っている女性を彼女だと気付いていないのです（っていうかBも気付くべき）。

・・・多分。

それならば、と僕は思いました。

トクノさんにその事を伝えるべきです。『ヤマダと彼女さんは付き合っているんだよ』と。

・・・。。。。。。。。。

。。。。。。。。。。。

。。。。。。。。。。。

何故に僕がそんな事をせにやなんのでしょうか。

ここは僕の部屋です。何で僕が扉の前に立ち尽くしながら人に気を使っ
てイチャイチャしているハツキリ言っ
て迷惑な友達を助けなけりや
ならないんでしょう。

とかまあ、何か負のオーラが心の底から沸き上がってきて段々腹が立
ってきました。

が、ここはヤマダの為ではなく彼女さんの為に、トクノさんに真意

を伝えたいと思います。

「あー・・・、ねえ」と扉の前で僕。

「何だ？」

と床の上からB。

「テメエじゃねえよクソミソ」と扉の前で若干イライラな僕。

「ああ・・・」と漫画を再び開いてB。

「何だよ」

と今度はA（本当です）。

「だからテメエじゃねえつてよ」ともうそろそろ憤慨しそうに僕。

「ああ、そう・・・」とパソコンに向き直りながらA。

『何？』と今度は彼女さんとトクノさんがほぼ同時に振り返りました。

ついでにヤマダも。

「あー・・・」

まさか二人とも振り返るとは思っていなかったので若干言葉に詰まります。

彼女さんがコッチを見ている前で「彼女さんはね云々」と説明するのは何か気恥ずかしいものがあります。

僕がそうやって言葉に詰まっていると、

「？」

ヤマダがコッチを見ているのに気付きました。まるで仲間になりたそうな顔です。

と言つかこの場から一目散に逃げ出したそうな、涙目でこっちを見

ています。

っていうかそんな目で俺を見るな！全部お前（半分は僕）の蒔いた種だろう！（心の声：僕）

だつて・・・！（心の声：ヤマダ）

そんな心のやり取り（僕の想像）をしているうちに、トクノさんは怪訝そうな顔を、彼女さんは僕に対して冷たい視線を送ってきました。

僕だつてもう涙目です。

そうこうしていると、不意にAがパソコンの前から腰を上げました。そして開口一番言い放ちます。

「暇だな。帰るわ」

テメエ人のパソコン弄繰り回しといてそりゃねえよ。とか思いました。が気にしません。

「そうだな。俺も帰るか」

と、今度は床に座っていたBも腰を上げます。するとベッドの上からも声が。

「私も帰るかな」と。

その言葉はトクノさんから。

いいやつほおうつ！

と今にも飛び跳ねそうな表情のヤマダ。それと僕。

「あ、ああ！じゃあ外まで送るよ！」

と僕は三人を外へと連れ出します。もはや執事さながらの動きを身に着けた僕です。

そうして外へと三人を連れ出した僕。

「じゃあな」と、AとBはバイクに乗って去っていきました。

「また来るよ」とは一言も言いませんでした。

「また来いよ」とは言いませんでしたけど。

最後、自転車に跨るトクノさんに、さっき言いかけた事を説明しました。

「あの女の人はヤマダの彼女なんだよ」と。

するとトクノさんはもの凄く綺麗な笑顔をつくり、

「知ってたよ（はあと）」

と一言言い残して、去っていつてしまいました。

遠ざかるトクノさんの背中を見送り、僕は笑顔で呟きました。

「どないやねん………」

まあ、いいや。と、僕は家の中に戻ります。

ああ、そういえばヤマダと彼女さんはまだ居るのです。
あの二人もとつと帰して寝よう。もう疲れた……。
そんな事を考えながら、自室へ続く階段を上り

「！」

僕は足を止めました。

声が聞こえます。

それからなにやら破壊音も聞こえてきます。
しかもその音の出元はどうやら僕の部屋。

これから僕は十分間、僕の部屋の中で繰り広げられていた彼女さん
のヤマダへの叱咤のおかげで、部屋の中に入れないのです。

「どないやねんッ!!」

最終話 カエレ！（後書き）

なっがい期間をかけてようやく最終話です。

と、いうか、この話を書いている間にもヤマダ絡みの事が起きました。

が、それは又いつか書くことにします。

それから、この話をコメディ小説だと思っている人が居るようなので言っておきますと、

この話は9割方事実です。

若干前話と食い違いがあったとするならば、それは時間が経ちすぎて作者の記憶が曖昧になっているからです。

と、いう事で楽しんで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2302c/>

どないやねんッ！ ～いいからテメェ等帰ってくれ～

2010年10月9日21時53分発行